

高等女学校の研究

— 教育実態と生徒の意識をめぐって —

新井淑子
(埼玉大学)

○ 倉宮 かおる
(お茶の水女子大学)

○ 福田須美子
(成城短期大学)

1. はじめに

現代日本の女子教育は、近代公教育体制下に形づくられた歴史的规定性を内包しつつ展開してきている。なかでも旧制の女子中等教育機関であった高等女学校(主に公立高等女学校)の教育は、日本の女子教育に性格づける主要な存在であった。

高等女学校の歴史は、1899年の高等女学校令制定以前を前史とし、1920年代に普及期を迎え、1947年の旧学校制度の廃止を境として終焉する。従来の研究では、政策史・制度史的研究が少しかつ進められなかったが、教育実態についてはいまだ十分明らかにされていざとは言えない。

本共同研究は、高等女学校の総合的研究を志すものであるが、今回は特に教育実態を明らかにすること及び生徒の意識を把握することを意図した。

2. 教育実態の変容

高等女学校の歴史を教育実態を中心にみていくと、おおむね次の三期に分けられる。第一期は1920年以前、第二期は1920年頃から1936年頃まで、第三期は1936年以降である。今回は特に第二期に焦点を置いたが、この期は、第一期と時代を画する大きな変容がみられ、今日課題とすべき様々な問題が具現してくるからである。この変容には第一次世界大戦後の日本社会の経済発展や大正デモクラシーという思潮の影響も作用している。また高等女学校教、生徒数の量的拡大が、社会階層の変

化や教育要求の多様化をうみ、質的な変容も生じさせていた。

まず、この注目すべき量的、質的な変容について教科内容、教育方法、教科外活動、生活指導、教師、生徒などの具体的にとり実態を明らかにする。

例えば教科内容では、理科や家事には実験や実習を増やし科学化への志向性がみられ、英語は選択科目として採用する学校が増え、読書指導の重視、洋楽の普及、水泳・陸上競技の採用など概ね近代化の方向がみられる。教科外活動では音楽会、講演会、バザー、運動会などが盛んに行なわれ、校友会活動も活発化する。教師については、いわゆる開明校長が高等女学校改革の大きな推進力となった。全体に教師の学歴が高まり、生徒の学力の向上や社会的進出に留意する点がみられる。

3. 生徒の意識の変容をめぐって

生徒の実態をみてみると、女性の階層が低くなった有産階級から中間層へ広がりをみせていること、卒業後の進路に就職や進学が増加することなどがみられる。こうした生徒の実態と前述の教育実態の変容を、生徒の自立意識の形成という観点で分析すると例之ほ次のような点が指摘できる。カリキュラムの近代化による学問や思潮への接触、課外活動の活発化による女性の表現活動の拡大及び可能性の開拓、その他「役割モデル」としての教師の存在、いわゆる女学生文化の開花との関連もみられる。